東京清陵会だより

第22号

編集・発行人
東京清陵会
（諏訪清陵高等学校同窓会・東京支部）
会長＝藤森宏一
事務局
〒101-0047 千代田区内神田3-24-5
神田シティホテル気付
TEL&FAX 03-5382-2302
DTP＝スタジオパラム
印刷＝中央印刷株式会社

東京清陵会新会長あいさつ

藤森宏一 新会長
（63回生）

今般の東日本大震災ならびに原発事故により、被災され影響を受けられた方々に、お見舞いを申し上げるとともに一刻も早い復旧復興と明るさが戻ることを衷心よりお祈り申し上げます。

災害の悲惨な状況を目の当たりにして、人知の無力さを感じながら誰もが、何とかしなければ、何か役立ちたいとの思いから、募金活動や現地でのボランティアなど何らかの行動をとったことではないでしょうか。東京清陵会の会員のなかにも、現地や後方支援に駆け付けボランティア活動をした方、また今も医療活動を続けている方々がおります。今回の災害を契機に、希薄化しつつあった人と人との繋がり・絆の大切さが再認識されたこと、また社会・経済の既存基準・モデルの見直しと変革への潮流は当然のことだと思います。

昨年10月開催された定時総会で東京清陵会会長に選任されましたのでよろしくお願いいたします。退任された小川勝嗣前会長と生越万理子前副会長の同窓会発展へのご尽力に感謝しお礼を申し上げます。

東京清陵会は、引き続いての課題として財政と会員数減少があります。財政は賛助金のご協力により危機的状況は回避できましたが、安定運営のため会費徴収方法等の見直しを、昨年の総会にて承認いただきました。平成23年4月からの3年間は、従来どおり年1000円とし3年間まとめてお支払いいただくこと、賛助金についても従来どおり会費相当額を目安に終身会員、免除会員のみなさんにもご協力をお願いしすること、平成4年4月導入した終身会員制度を、平成26年3月末をもって廃止することにし、平成26年以降については今後改めて取り決めることにしました。

平成8年会員数が4179名であったものが、昨平成22年には3628名と減少しており、会費の納入にも影響が出てきました。会員数の減少は、当会に限らず同窓会活動の傾向のようですが、永続的な会発展のためにも会員の増加が必要であります。入会したい魅力ある同窓会にするために行事を充実させることや、現役若年層や年々増えている女性会員が行事に参加しやすい環境づくりも検討してまいります。当会には公式非公式を問わず会員相互の交流の行事がありますが、必ずしも周知されているとはいえません。より多くの卒業生に知らしめ交流の機会を作るためにも、名簿とホームページを整備し活用することといたします。

名簿は同窓会運営の原点であり、会員動向の把握は必須であります。概ね10年を目途に発行されてきており、平成14年の「人名録」からほぼ10年になります。個人情報の取り扱いなど事情もありますが、本部の120周年の名簿作成と連携して皆さんの協力をいただきながら、会員動向把握を徹底させ発行の可能性を検討いたします。

ホームページについては、林尚孝元会長が作成し運営中のものを事務局で引き継がせていただき、諸々の同窓会関連情報を掲載発信し、会員増強と交流のツールとして充実したいと考えております。

母校は、平成26年4月に併設型中高一貫校として付属中学を開校することが決まりました。県教育委員会あて推進にかかわる貴重なご意見をお寄せいただきました会員の皆様にお礼を申し上げます。今後も本部同窓会と歩調をあわせて母校への支援活動にも注力したいと考えております。

東京清陵会が、故郷との絆、同期との絆、先輩後輩との絆、クラブ活動仲間との絆を確認し、大切にしながら語らい、情報の発信・受けとり、交流の場所として活用されることを期待します。皆様の積極的な参加とご協力をお願いいたします。

今期役員は次の方々です（敬称略）。

副会長　平林　千義（67回）（兼事務局長）
副会長　長田　宏子（62回）
副会長　金子　充宏（65回）
副会長　平林　千春（69回）
事務局次長　大島　道雄（71回）
事務局次長　林　健康（72回）
事務局次長　関屋　孝行（76回）
会計幹事　有賀　朝彦（63回）
監査幹事　今井　恒夫（57回）
監査幹事　小林　国利（62回）

2011年度 東京清陵会 第45回定期総会案内

日時＝**2011年10月14日（金）** 午後5時～8時30分
総会＝午後5時～5時50分　懇親会＝午後6時～8時30分
（午後4時30分より受付開始）
場所＝**アルカディア市ヶ谷**（私学会館）4F「飛鳥」・3F「富士」
東京都千代田区九段北4-2-25　☎03-3261-9921
市ヶ谷駅（JR、東京メトロ有楽町線、南北線、都営新宿線）
下車、徒歩2分

議題① 2010年度会務報告 決算報告　② 2011年度事業計画 予算案
③ 賛助金の納入状況　④ その他
懇親会＝**会費 8,000円**（学生2,000円）
※当番幹事＝78回生、次期当番79回生、サブ幹事88回生、98回生

●ご面倒ですが出席、欠席いずれの場合でも同封の返信用はがきにご記入の上、**9月30日（金）**必着にてご返送ください。

特集 いま、僕らにできること

僕らはいま、天災・人災を合わせた未曾有の大災害の渦中にいる。二〇世紀型の社会システムの破綻は、もはや明らかだ。この歴史の転換期に、清陵を出て首都圏で働く僕らにできることは何だろう？　当番幹事として集まった七八回生は、まずは自分たちの「いま」を見つめ直すことから始めようと考えた。被災地の同期生を取材し、また今やりたいこと、やるべきと思うことを率直に語り合うことにした。同窓生諸氏には、まずはありのままの七八回生の姿を見てほしい。そして、忌憚ないご意見を頂戴したい。

❶大船渡3・11
――同窓生はこう戦った…… 2
❷ネットワーク社会へ――
78回生、コミュニケーションの明日を語る …… 6
❸三澤勝衛の原点へ
――78回生、農の明日を語る …… 8

特集 いま、僕らにできること❶

大船渡三・一一――同窓生はこう戦った

死者三三〇名、行方不明者一二二名、建物全半壊三、六二九棟。岩手県最大の港湾都市、大船渡市の被災状況である（七月末現在）。七八回生の渡辺律君は、この地で妻の美紀さんとともに歯科医院を営んでいる。医院兼住宅は、幸い津波の被害は免れたものの、地震により基礎が傷んで一部損壊の状態。七人のスタッフのうち四人も被災した。彼らはそのとき以来、何を考え、どう行動してきたのだろうか。新聞委員の川村と石埜が現地に取材した。

●上＝大船渡地区の模様／右下＝傾いた火の見櫓に復興を願って鯉のぼりが飾られていた／左中＝大船渡駅前の商店街／左下＝対岸から見た大船渡港。約50cmという地盤沈下の様子が見てとれる

三陸海岸。遠く美しい土地が……

東京駅から平泉の世界文化遺産登録に沸く一ノ関駅まで、東北新幹線で二時間四〇分（七月末現在）。そこからレンタカーを借りて二時間あまり。大船渡は確かに遠い。しかし、道中の山々や風格ある山村の数々は、信州に勝るとも劣らず美しく、しかもその先には、まばゆく輝く太平洋が長旅のご褒美のように姿を現す。

だが、三陸リアス海岸の平地という平地は、いまだ言葉を失うほどの惨状にあった。気仙沼。陸前高田。そして大船渡。多くの報道で見聞きしてはいたものの、じかに目前にすれば、ただ息を飲むほかない。津波にすべて呑み込まれた一帯は、家々の土台だけを残し、まるで埋め立て地のようにただただ平坦だ。うずたかく積まれたがれきの山はきれいに分別され、ひところ報道されたような臭気や蝿の群れはもうない。これまでにどれだけの労力が注ぎこまれてきたことか。そしてこれから先、さらにどれだけの労力を注ぎこまなければならないことか。

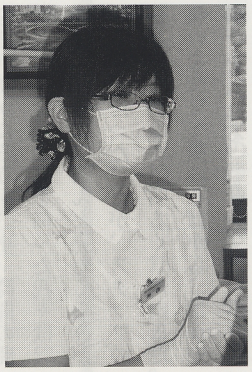
駅すら流されて跡形もない、大船渡港に面した大船渡地区。津波はそこから三キロ近くも遡上し、市役所のある盛地区にまで達した。渡辺歯科クリニックは、その盛駅から国道四五号の緩やかな上り坂をさらに一キロほど北上した住宅地にあった。さしもの津波もここまでは及ばず、街並みは平穏な日常を取り戻しているかに見えた。受付に来訪を告げると、「聞いております、お待ちしておりました」とにこやかに迎えられる。ほどなくして奥から渡辺律君が、清陵時代そのままのやさしい笑顔とともに現れた。三十何年ぶりかの再会だった。

スタッフが語る それぞれのドラマ

渡辺歯科クリニックは、いま非常に多忙である。大船渡・陸前高田地区にあった二八軒の歯科医院のうち、

●左＝気仙沼港にて／中＝再開したばかりの「おさかな市場」だが、冷凍・塩干物がほとんどだった／右＝更地と化した陸前高田の市街地にうず高く積まれたがれきの山

六割を超える一七軒が全半壊してしまったからだ。閉院時間になっても、まだ何人もの患者さんが残っている。そこで律君夫妻（昔のとおりこう呼ばせてもらう）の診察がすべて終わるまで、手すきのスタッフの皆さんに被災の体験談を聞かせていただくことになった。どのお話も、想像を上回る人生のドラマであった。



●原田さん（歯科衛生士）

原田さんは大船渡湾を目の前にした自宅が流された。

「当日は患者さんの処置をしていました。すぐに停電になって、テレビも情報もないんです。患者さんをお帰しして、ちょっと片づけをしていたら、『とりあえず帰れ』といわれたんですが、実はもう津波の一波・二波は来てたんですね」

クルマで向かった国道は大渋滞。家族にメールもつながらない。やっと橋に出たら、川が全部がれきで埋まり、道もなくなっていた。無理やり乗り越えようとするのを制止され、教えられた迂回路に向かったら……

「走ってきた父にばったり会ったんです。涙？　出ませんよ、もう必死で。何が起きたかわかってないし」

クルマを乗り捨て、父娘で歩いてがれきを渡って自宅に向かった。

「濡れた畳って滑るんですね～（笑）。がれきの下に犬がキャンキャン鳴いていたり。それから三陸鉄道のトンネルを通って行って、やっと見えた！と思ったら、家が土台しかないんです」

それから、家に一人でいたはずのおばあさんを探して歩きまわり、『もう歩けない』と思ったところで目撃情報を得て、知らない人の家の玄関に座っていたところを発見し、その玄関先で一泊させてもらったという。

翌日は、隣町・陸前高田の工場で働いていたお母さんを父娘で探しに行き、無事対面することができた。

●山口さん（歯科助手）

原田さんと同じく自宅が流された山口さんは、クルマでの帰路が既に通行止めだった。家族から『逃げたから大丈夫』というメールが入っていたので、とりあえず盛駅近くのご主人の実家に向かったところ、そこにもがれきが流されてきていた。『まさかここまで』と驚きながら避難した小学校に、なんとご主人が迎えに来たという。

「驚いて『なぜ？　どうやって来たの？』と聞いたら、三陸鉄道のトンネルを歩いてきたっていうんです。それも、布団や食料を抱いたり背負ったりして（笑）。目は真っ赤で見たこともない表情で、『びっくりしないでね』といって、流された状況を話してくれました。あとで見に行ったら、『何が起きたの、これは？』『え、怪獣来た？』って感じで（笑）」

今は、ご主人の実家が持っていた古い家に住んでいるという山口さんは、「住むところがあって、申し訳ない感じです」という。だが電気は一カ月、水道は二カ月止まり、電話はまだ通じてない。

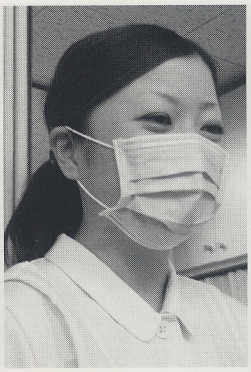
●炭釜さん（医療事務・受付）

炭釜さんの場合は、自宅も家族も無事。ただ、目前で津波に遭遇している。

「クルマで医院を出て、コンビニに寄ろうとしたら、正面でクルマが止まっていたんです。その向こうに煙のようなものが見えました。火事かなと思って見ていると、その下からじわじわって感じで水がやってくるのが見えたんです。あわててUターンして、バックミラーで確認しながら逃げました」

幸い高台に上がることができ、見ず知らずの家のプレハブで一夜を過ごしたという。怖かったですか？

「別に怖くはなかったです。ただ、バックで逃げているクルマと並行して走っていたのが不思議な感じで、印象に残ってます」



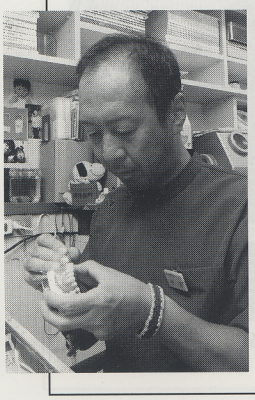
●土工さん（歯科衛生士／宮崎出身）

土工さんは、震災時は隣町・陸前高田市の歯科医院に勤務していて、やはり勤務中に地震に遭遇した。

「何分かして、先生が『逃げるぞ！』と叫びました。患者さんもクルマに乗せて、高台に逃げたんです。でも、私は宮崎出身で津波とか知らないから、『いやだ、帰る、帰る』って（笑）。アパートに猫とかペットがいたんです。先生に『命、大事にしろ！』と怒鳴られて、泣きながらクルマに乗っけられて……」

翌日、一緒に住んでいた彼氏が迎えに来て、彼氏の実家に避難した。

「その歯科医院もアパートもみんな流されました。ここに雇ってもらえてよかったです。みんなやさしいし」



●刈谷さん（歯科技工士）

刈谷さんは、自宅に加え、奥様の実家も全壊した。

「津波なんてことは正直な話、思いもしませんでした。停電でテレビも見られませんし」

余震に備えて技工室を整理し、クルマで自宅に向かったのは三時二、三〇分頃だった。

「防災無線は聞こえませんでした。ラジオも聞いていたのかどうか、記憶にありません。あとで考えてみたら、本当はワンセグでテレビが見られたはずなんですが」

渋滞がひどくなって道の駅で止められ、そこから四、五キロの道のりを歩こうとしたら、ちょうど出くわした義妹が『じいちゃんが、じいちゃんが』と訴える。その方向に向かうクルマをつかまえて乗せてもらった。

「嫁の実家に近づいたら、どこか何か景色が違うという感じで。見慣れた家々の位置が、津波で変わっていたんです。そこから三陸鉄道の下に出た瞬間、そこはもうがれきの山で、『嫁の実家がない！』と……。結局、義父と義母は亡くなりました」

現在は仮設住宅で、「仮設を元気にする会」の活動に取り組んでいるという刈谷さん。最後の言葉はとても重かった。

「誰も波を見ていません。見たのはがれきだけ。エッ！ていう感じで、実感がないんです。流した涙も、もうその感覚は忘れました。今、やっと泣けるようになってきましたね」

●村上さん（歯科助手）

村上さんは、ケータイの情報で一〇メートルの津波を知り、みんなに伝えた功労者だ。自宅は高台のため、被害がなかった。「すいません、って感じです」と語る。

「でも、みんな『よかったね』っていい合ってくれて。『笑えることは笑おう』って、友達とも話し合ってたんです。ここはみんな仲よくてやさしくしてくれる、ほんとにいい職場だと思います」

……いかがだろうか。小一時間の間にこれだけのお話を伺った我々は、中身の濃さにほとんど立ちくらみがする思いだった。だが、スタッフの皆さんはあくまで明るく、前向きだ。笑いを交えて語るそばから、誰かが茶々を入れる。「みんな笑い話だよね！」という声も。そうこうするうち、診察を終えた律君が声をかけてくれた。

「どうですか？　大船渡は二年もたてばなんとかなってますよ」

すると、傍らにいた奥さんの美紀さんが言った。

「そうかなあ、たいへんだよ」

「たいへんだけど、なんとかなってきてるんだって。今からでも誰かが『いつまでに何をやります』と言ってくれればね」と、律君。

「でも、みんな強いよね」と、美紀さんがつぶやいた。

孤独な戦いの始まり

さて、律君の番である。被災を免れた数少ない飲食店の一つに場所を移して、美紀さんとともにじっくりと話を聞いた。

「二時四七分でしたね、地震は。すぐに停電になって、患者さんにはまず帰ってもらって、片づけをしたり、余震に備えたりして、三時過ぎたくらいに職員も帰したんです。次の日人に聞いたら市内が想像以上にすごいことになってるから、（絞り出すように）『あのとき帰さなきゃよかったなあ、ひょっとしたら巻き込まれてるんじゃないかなあ』と思って、そればかり後悔してました」

夜になってクルマで状況を見に行こうとしたら、あちこちが通行止めでその先のことは分からない。カーナビのテレビをつけても、地元の情報はほとんど得られない。実は震災の当日、美紀さんは仙台の病院に入院していた。三人のお子さんも既に別々の街で大学生活を送っていて、律君はライフラインがすべて途絶えた自宅に一人取り残されていた。食べるものはサキイカくらいしかない。余震に備えて酒も飲めない。カセットコンロで暖を取ろうとしてもボンベがなく、あったはずのラジオも見当たらず、懐中電灯もすぐに電池が切れてしまった。寒さと不安に眠れぬ夜が明けたら、警察がやってきた。なんと、検死の依頼である。

「歯の治療記録は歯科医院に必ず残しておくことになってますから、ご遺体の歯の特徴をすべて記録しておけば、身元確認の有力な手掛かりになるんです。本当なら研修を受けた専門の委員がいるんだけど、被災してるんで。朝六時ぐらいに迎えが来て、警察署に歯科医三人が集められたんですが、他の二人は別の遺体安置所に向かっちゃって。私は近くでご遺体が見つかったというんで、一人でその収容のところから連れていかれました」

情報がない中三日間検死を

引き波に置いていかれたご遺体が、立木に引っかかっていた。警察官が四人がかりで降ろして担架に乗せ、一緒に遺体安置所のお寺に向かう。

「たいていご遺体は、運ばれてくるときは泥だらけで真っ黒です。それを警察の人が写真を撮りまくって、そのあと服を脱がすんだけど脱げないから、年配の看護婦さんが手際よくザアーッと切って、検死担当医がそれを見ながら、『溺死ですかね』『いや、わかんない』って（笑）。全身の所見を警察官が取ったら、『はい、歯医者の先生お願いします』って言われて、内心『うわー』っと。触りたくないですよねえ、やっぱり」

無我夢中で合掌してから、一本一本の歯を見ていく。本来は歯科専門のペアで行う作業というが、人手不足で律君一人。事前に若い警察官に概略を教え、記録係を担当してもらった。

お寺も停電で火の気もなく、寒さに震えながら次のご遺体の到着をひたすら待つ。一度到着すると、立て続けの検死だ。それが日暮れの五時まで続いた。

「ご遺体に直接触れるのは大学の解剖実習以来なので、最初の何人かは特に苦痛でした。でも、慣れちゃうんですねえ。PTSDですか？　ある日突然出るかもしれないけれど、

●律君が検死を行った大船渡市内の洞雲寺。地域の技能集団・気仙大工による江戸期の名建築。左側の建物が遺体安置所となった

なるべく考えないようにしてます」

拘束されている間、情報がほとんど入ってこないのもつらかったという。警察も何が起こったのか把握できていなかったのだ。

「警察官が、陸前高田では一万人ぐらい死んだんじゃないかって言ってたんですよ。直後に見た惨状がすごかったんでしょうね」

帰宅したら帰宅したで、真っ暗で食べるものもない。ガソリンも残り少なくなったクルマの中で、二〇分くらい暖を取りながらカーナビのテレビを見るのが最高のぜいたくだったという律君、美紀さんの方を振り返って言った。

「ほんとに、こいつだけでもいてくれたら話ができたのに」

「いやいや、こっちはこっちですごく心配して」と、美紀さんが返す。

「とにかく、ひとことで言えば淋しかったですねえ。犬が二匹いたけど、話しかけても『クゥー』としか言わないし（笑）」

四日目に千葉県警の専門家が応援に来て、律君はまるまる三日間の検死から解放されたのだった。

●渡辺歯科クリニック正面にて。奥のVサインが渡辺律君（左下写真も）、その右隣が美紀さん

診療再開とボランティア活動と

解放された律君は、盛岡にいる娘さんのところへと向かった。家族と連絡を取り、そして被災の全貌を知りたかったのだ。

「沿岸部はメールも電話も何も通じないし、地元の放送局もまったく事態に太刀打ちできてない感じで。盛岡まで行って、やっと子供三人にメールができたし、全貌が把握できました」

律君は、翌日には大船渡に戻り、市内の歯科医数人とともに、県立病院の中に部屋を借りて仮設の歯科診療所を開設する。ポータブルユニット一台で、本当に必要な応急処置だけを行ったのだ。

「そこに、自宅が流されたスタッフが、ボランティアで集まってくれたんです。本当に頭が下がる思いでした」

渡辺歯科クリニックでは、一週間後に電気が復旧したので、水道の復旧（一〇日後）を待たずに三月十九日、市内で二番目に診療を再開した。

「スタッフが二リットルのペットボトルをたくさん持ってきてくれて。あと、トイレ用にでかいポリタンクに川の水を汲んできてくれたスタッフもいましたね」

とにかく明るくて仲のよい、優秀なスタッフの皆さんであるようだ。美紀さんも四月三日には退院して帰ってきて、職場に復帰する。だが、律君にはまだまだやるべきことがあった。

「歯科医師会の仲間と輪番で、避難所へ口腔ケアに行ってました。お年寄りなんか、歯磨きをしなければ誤嚥性肺炎とかを引き起こして、命にも関わってくる。『歯磨きできない人は私たちが代わりにしますよー』というようなことを言って、ボランティアでやってました」

幸い七月末には仮設住宅がすべて完成し、避難所はその役割を終えた。

「被災した地区と難を逃れた地区とでは、天と地の違いです。うちが助かったのは本当に心苦しいです」と語る律君。しかし、だからこそ、目の前のすべきこと、できることを精いっぱいやろうとする姿勢には頭が下がる。

地域への思い、同窓生への思い

では、律君の大船渡への思いはどのようなものなのだろう。

「女房が隣町の釜石出身とはいえ、私はまったくのよそ者なのに、この町で受け入れてもらい、育ててもらったので、それはやっぱり倍返しで……」

首都圏が被災したとして、我々は『育ててもらったから倍返しで』と考えることができるだろうか。被災地の報道に触れた我々は、安易に『東北の人は辛抱強い』などと考えがちだったが、本当に人々を支えていたのは、きっとこの地域の絆だったのだ。それは首都圏になく、東北にあり、諏訪にもあるものだ。

「こんな時だからこそ、できる範囲で、倍返しはしたいですね。子供三人もこの町に育ててもらったわけだし。三人が大学を卒業するまでがんばって、そのあと、『デクレッシェンドのように』引退するのかなあ」

盛岡の岩手医科大学の先輩後輩だった律君夫妻は、大学のオーケストラで出会い、今も共通の趣味として音楽活動を続けている。そういえば渡辺歯科クリニックの名刺には、歯科・矯正歯科と並んで『管楽器歯科』の肩書があった。管楽器奏者にしか分からない、管楽器奏者のための矯正や治療を行っているのだ。現在は近隣の音楽ホールがすべて被災したため、メンバーとなっている市民吹奏楽団の活動も停止したままという。早期の復興を願うばかりだ。

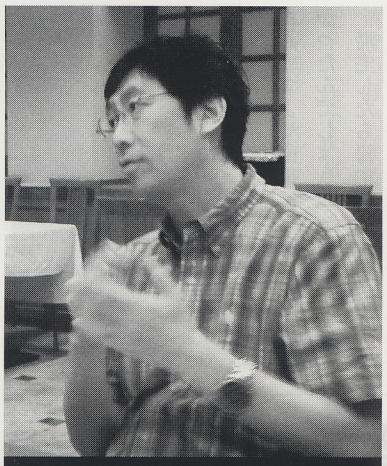
最後に律くんから、我々同窓生へのメッセージをもらった。

「心配して来てくれたのが非常にうれしかったし、これから明日に向けて頑張って仕事しなけりゃと思いました。もう心配してくれなくて大丈夫です。今は、見た目は仮設ができたり、建物が建ったりと、少しずつ復興に向かっていますが、実は町も人も疲れて、心が病んでいます。だからかえって、『心のケア』とか大きな看板を胸に下げてくるような人にはイライラさせられるんです。大層な名目はなくていい、来てくれなくてもいいので、ただ、遠くから祈っていてください」

特集 いま、僕らにできること②

ネットワーク社会へ――七八回生、コミュニケーションの明日を語る

震災は、通信や放送のあり方にも大きな課題があることをあぶり出した。伊藤、川村、両角の三名は、まさにその当事者として渦中にあった。その経験から、いま明日への展望を探る。（聞き手＝石埜穂高）



川村益昭
日本テレビ放送網 編成局 業務部長

その日何が起こったか

――みんなあの日は何をしていた？

伊藤　俺はたまたま大崎の駅にいて、そこから新宿のオフィスまで三、四時間かけて歩きましたね。そのとき思ったんだけどさ、やっぱりインフラがまだ有事に追い付いてねえなと。通信回線はほとんどパンク状態だし、交通網が全然だめだったね。うちの会社でも百人くらい帰宅難民になっちゃって。

両角　僕は総務・人事本部も担当してるんだけど、当日は揺れが収まったらすぐ会長と社長が在席かどうかを確認しに行った。災害対策本部を立ち上げなくちゃいけないから。で、二四分後に立ち上げて、それ以来一週間泊まり込みでしたね。最優先が社員の安否確認で、次が通信インフラの被害状況の把握です。

川村　だいたい世間の会社って社員を帰すことを考えるけど、うちは逆に放送のために人を集めなくちゃいけない。だけど通信網がズタズタになると、本当に無力なんだ。テレビ局って全員、大地震が来たらどうするってことを頭の片隅に必ず持ってるから、みんな「ついに来たか」と思ったはずなんだ。でも準備した割には、報道以外は右往左往するばかりで、災害対策本部はとうとう立ち上がらなかった（笑）。弱さが露呈しちゃったのね。

両角　だけど、何が起こったかが一番的確に情報として得られるツールは、まずテレビだよね。そもそもこの地震と津波がどのくらい大きなものだったかというのは、テレビの映像でわかった。

伊藤　俺もあのとき、あんなすごい津波があったなんてことは全然知らないでふらふら歩いてたわけよ、テレビ見てないから（笑）。オフィスに戻ってから本当にぶったまげた。

復旧への戦い

――エプソン製品はデバイスとして放送にも通信にも関わってるだろうけど、どうだったの？

伊藤　あの地震では、東北の四工場は相当被害を受けたね。それで部品がちゃんと供給できなくなるから、いかに早く立ち上げるかにはすごく苦労した。特に福島事業所は、原発二〇キロ圏内にあるんで一番大変だった。ここだけは、いまだに再稼動のメドがたっていないんだけど、一度どうしても工場に入って重要な備品を持ち出したいって話になってさ。そのとき南相馬市に電話したら、「分りました、ぜひ行ってください」って言ってくれて。市の職員も同行してくれたし、ほんと、あれには勇気づけられたね。

――KDDIは「東北ほぼ復旧」って発表をしたよね。

両角　最初九月と言ってたのを六月末に早めた。実はうちでは、東京から仙台まで四ルートあるうち、東北自動車道、常磐自動車道、太平洋の海底ケーブルの三ルートが全部ぶち切れて、日本海側に近い電力ルートっていう細いルート一本しか残らなかった。これで実は、サービス上は関東と東北が断絶したんですよ。基地局も二六〇〇局が停波。だからとにかく復旧だと。高速道路の幹線ルートは、工事部隊を何班も派遣して、とにかく月曜日に会社が動き出す前にもう一度つなぎ直せと。実際に日曜日の夜には復活したんだけど、光ファイバーケーブルを持って一五キロ走ったって言ってた。切れてる場所を見つけては融接して。

――やっぱり事前に訓練しているの？

両角　毎年二回災害対策訓練をやっていて、全部プログラムができてて。地震が起こった瞬間に、北海道や九州の移動基地局の要員たちはすぐ出発した。沿岸の基地局は津波にさらわれるのがわかってるから、電源車と保守車と、とにかく運転していくわけさ。避難所に基地局を立ち上げると、そこだけは電話がつながる。これはほんとにうちが一番早かった。それでもやっぱりまだまだ遅いし、そもそも東京では九五％規制っていって、百回かけても五回くらいしかかからない状態になってた。

●大地震による常磐道の被災状況。路肩に埋設されている光ケーブルは、路肩の崩落によってひとたまりもなく断裂してしまう（KDDI提供）

両角寛文
KDDI 代表取締役 執行役員副社長

伊藤高光
セイコーエプソン 企画渉外部長

通常の百倍じゃきかない量のトラフィックがあったから。それで、ぜひメールを使ってくださいと。音声は一本全部線をつなげないと成立しない通信だけど、メールはサーバーを経由するから、遅かったとしても届くんだよね。それから、災害用伝言版をすぐ立ち上げて、案内のホームページを作って広報をやって。

ネットワークを考える

伊藤　すごいな、通信は。さあ、放送はどうする（笑）

川村　僕らも当然停電のことを考えてるから、非常用電源の給油は契約してあるわけですよ。なのに、「いや、もう油が」って話で、来やしない（笑）。そうこうするうち、被災地の宮城テレビから「助けてください、うちの重油があと半日で切れます」って電話があった。うちもないわけだから、みんな電話かけまくりで。結局中京テレビが「うち、若干重油に余裕があるんで運びます」っていって、偶然間に合ったんだけど（笑）。で、俺、この東京に直下型地震が来たら、誰が僕たちを取材してくれるんだろうって思っちゃったわけ（笑）。この一極集中の状況じゃ、誰も全国に東京の状況を伝えられない。たとえば大阪の読売テレビが二四時間体制で放送できるかって言ったら、がれきの山の東京からどうやって放送テープを運ぶかも決めてない。これで本当にネットワークなのかなと。道州制じゃないけど、エリアごとの強い放送局と、身近な問題を伝えるケーブルテレビみたいな局とで再構築しないと、今のままではたぶん本当の役割は果たせないなあっていう危機感を持ったね。

――通信はもともとネットワークだから大丈夫？

両角　実際にはあれだけ大きな災害があると、まだまだ脆弱性があることは痛感したね。東京直下だとどうなるんだろうということが、やはり我々にとっても非常に大きなテーマで。今までも分散してきてはいるんだけど、より分散させなくちゃいけない。本社も、契約センターも、物流とかお客様サービスセンターも、すべての必須な機能は、最低二つか三つ必要だというのは、これは間違いないよね。

伊藤　メーカーもそうなんだよね。特に自動車部品なんか東北にすごく固まってたから。俺も今回ずいぶん考えたんだけど、とにかくムダに電力使いすぎてるわ。省エネなんて当然の話で、もうムダなものを作るのはやめる社会にしないと（笑）。経済活動そのものをもう少しシュリンクしていかないと、俺たちの地球が守れないんじゃないのっていうのが今回すごく感じたこと。

川村　おごっちゃいかんというか、弱い日本をはじめて実感したというか。原発だって、地震があっても安全だって言っておきながらそうじゃなかったわけだし。大地震はこの国の宿命なんだって割り切りを持たないと、次の発想は出てこないよね。

情報の正確性と安心と

両角　今回本当に正確な情報が流れてたかっていうのが、僕はすごく疑問で。三月一四日に福島原発が水素爆発したじゃない。あのとき社内では、「これ、もしかするとすごくやばいことになってるかもしれない」って思って、すぐにガイガーカウンターを購買を通じて買い集めた。とにかく三〇キロ圏内に近づくやつには持たせろと。で、インターネットを一生懸命調べて、六マイクロシーベルト以上になったらすぐ引き返せという規定を作った。後から計画的避難区域になったところにも、最初から迂回の指示を出した。

川村　原発ではうちも翌週に研修を始めた。報道魂っていうか、「撮りたい」と「危険かも」のギリギリのところで現場にダーッと行ってしまうから（笑）。たぶんほんとは、隠された情報をほじくり出すのは僕らの仕事なんだよね。そこが全部伝えられてないのが口惜しくてね……。

伊藤　話は変わるんですが、今回は工業会全体で被災地支援を決めて、うちの会社もプロジェクタやプリンタを無償で提供して、避難所の人たちが「助かった」って言ってくれた。少しでも社会貢献ができて、ちょっとうれしかったんだけどさ。

――経済をシュリンクさせても絶対残したいものはあるよね。

伊藤　そうそう。今回もフェイスブックで世界中から応援メールをもらったんだけど、こういう世界規模でのコミュニケーションって、俺たちの子供の頃はまるっきりなかったわけだし。それができるようになったのはすばらしいと思ったね。

両角　現実のミクロの部分ってのは、やっぱり一人ひとりのコミュニケーションが大事なんだね。避難所で移動基地局で電波を出したら、それで初めて離れて住んでいるお父さんと電話ができて、涙を流して喜んでいる女の子の姿を見て、もっともっとやらなきゃいかんなと思った。今は、仮設住宅向けにまた電波を全部届けようということをやってる。義援金も出したけど、一番やらなくちゃいけないのはサービスそのものだということを痛感したね。

川村　僕も、近所の飲み屋さんのバイトで岩手の子がいるんだけど、偶然うちの番組の被災者メッセージに、連絡が取れなかったいとこたちが出たのを見たんだって。それですっ飛んでいって、涙を流して抱き合ったっていう話を聞いて、やっていてよかったなあって思ったね。

●7月2日、神田シティホテルにて

特集 いま、僕らにできること③

三澤勝衛の原点へ――七八回生、農の明日を語る

当番幹事に、東城、宮原二名の農学博士がいる。大震災は農業にも大きな被害を与えたが、それ以前にこの国の農の危機は深刻だ。二人の見つめる明日には、実はわれらの原点があった。（聞き手＝川村・石埜）

宮原佳彦
独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構
生研センター生産システム研究部 部長　農学博士

農業の機械化と環境との調和と

――二人はいま、どんな研究を？

宮原　農水省の食糧政策を農家に行き渡らせる方法論の一つとして、農業機械の開発研究をしています。自分は特に稲作が専門で、トラクター、田植え機、コンバインというような機械を、自分たちの工夫やメーカーさんへの働きかけで、改良したり新しいものをつけ加えたり。

東城　私も偶然同じ分野なんですが、大学の地域生態システム学科というところで、かなりスピンアウトした研究をやってます。バイオマスや自然エネルギー、再生可能エネルギーを切り口にした装置やシステムの開発ですね。そもそもの問題意識は、戦後の農業が食糧生産に偏ってしまったところにあります。だから、食糧が余ったり海外から調達するようになると、農業全体が衰退してしまう。本来農村には、里山に行って柴を刈って、それを冬は燃料にしてっていう、ある程度自給的な生活基盤があったわけです。それが農業政策やエネルギー政策でだいぶ変わってしまって、農村の荒廃につながっていると。

――農業って食糧生産だけじゃないんですね。ところで、二人が農学を志したきっかけは？

東城　私は家が農家で。ただ大学に行くときは、農地に頼らずに食糧生産したいという、いまの方向性とは真逆の夢がありました（笑）。農工大で農業工学の学科に入ったら、そんなことは全然カリキュラムになかったんですが、十年後くらいから日本の食料が余るようになって、同時に環境問題が大きくクローズアップされてきて。そんな流れの中で、いまの研究に至りましたね。

宮原　東城さんも僕も清陵では生物部だったんですが、その頃から生物部には環境意識があったように思うんです。諏訪湖の水を取って微生物を調べたり。その延長で筑波大学の農学部に入って、微生物や植物を追っかけようとしたんですね。ところが筑波には機械に熱心な教育大系の先生方がいて、ちょうど世界の食糧危機が語られる時代だったんで、勧められて農業工学の道に入りました。

●東京農工大の遠山茂樹教授らが開発した農作業用のパワーアシストスーツ（東京農工大提供）

大震災のインパクト

――今回の災害は、原発も含めてですが、どういうインパクトがありましたか？

東城　そうですね、福島原発は昔から危ないと言われてて、追求されると「それは絶対起こらない」っていう答えしかなかったと聞いてるんです。だからある意味、起こるべくして起こったと思いますね。設計上、百年確率・千年確率という考え方があるわけですが、そこで手を抜いたとしたら、技術者倫理からして許されないことだと思います。まあ起きてしまった以上、我々は農業で何かできることがあれば全力を注ぐという立場にあります。

宮原　僕はあのとき、全国の農業機械の研究者と、さいたま市内の職場で会議をしていたんです。その中に東北各県の方が何人もいて、結局研究所内に泊まってもらったんですが、その間にあの惨事がどんどん伝わってきて。特に、津波が農地を覆っていく映像は衝撃的でした。いままさに、あの田んぼの塩害対策を機械でどうやるかというのが課題です。耕地の放射能対策についても、仲間がさまざまな技術を検討してます。

農業の危機的高齢化をどうするか

――日本の農業はただでさえ弱ってるのに。

宮原　もう、人口の半分以上が六五歳以上の農村地域が当たり前に存在しますので。農業をやめちゃうと環境は間違いなく壊れますから、まさに危険な状態です。

――諏訪では幸い、里山が生きてますよね。みんな山に入るのが大好きで（笑）

宮原　その文化は絶対失っちゃいけないし、それが日本をもう一度活気づける方向なんじゃないかと思います。漁業者も農業者も、天災が来るってことは知恵として受け継いでいるはずで、自然の脅威をわかった上でどう共存するかというのが本来の姿で。

東城　里山も人の手を入れて管理していかないと、最後は災害の原因になります。やっぱり農業機械の出番ですかね（笑）。

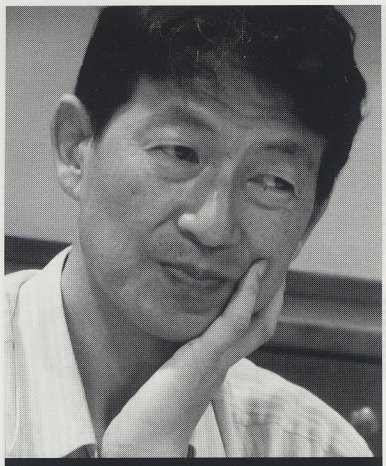
宮原　農工大の工学系の研究の中には、農作業のアシストスーツみたいなものもあるんですよ。あとはエネ

ルギーを里山の中で、自然を壊さない程度に小さく生み出す、バイオマスや水力発電、地熱、太陽熱ですね。

――若者に農業の楽しさを伝えることも大事ですよね。

東城　そこが課題ですね。いま農学部の学生にも、農家出身なんてほとんどいないですね。卒業後に新たに就農する人も、一学年三百人のうちの三人とか。むしろ、リタイア世代ですね。ビルの屋上で、カセットコンロのボンベで動く耕耘機で家庭菜園をやるとか（笑）。自給的なやり方を楽しむというのがこれからの一つの方向性じゃないでしょうか。農産物の価値は相対的に安くなりすぎましたから。

宮原　その土地ならではのおいしいものはもっと高く、大量生産品は安くっていうすみ分けのシステムがうまく機能しないかなあと。FTA（自由貿易協定）とか言われちゃうと一律の話なんで。農業も多様化した上で、各地の産物の本当の価値を知らしめないと。



東城清秀
東京農工大学 大学院教授 農学博士

東城　いま農家人口は六％あるんですが、基幹を支えている就業人口は、農林水産業全体で二％しかないんです。トウモロコシとか大豆とか、価格で輸入品に太刀打ちできない。世界の大豆の六割は遺伝子組み換えですからね。加工用に使われてます。でも、作物なんて昔からみんな遺伝子を変えてやってきてるんです。それで農薬や肥料を減らせる。一つの農薬でも農業全体で使うと、生態系がいっぺんに変わってしまいます。だけど日本では、品質に対するほんとに厳しい要求がありますからね。

宮原　キュウリでいえば、流通を合理化しようとすると、まっすぐで大きさが揃ってた方が箱は同じものが使えるし。ただ、現地で消費されるものはもっと自由にしていいというのが今考えられてるところで。

津波被害より はるかに大きい減反

――なんか農業って、震災以前にすごく傷ついてる？

東城　震災で被害を受けたのが、確か二万三千ヘクタール。それ以上に、減反面積は常時七十万ヘクタールから百万ヘクタールもありますから。

宮原　耕作中の水田が全国で百七十万ヘクタールぐらいしかないのに。耕作放棄地も、統計上だけで四〇万ヘクタールあります。

――食料自給率も下がりっぱなし？

東城　日本が金持ちになったからでしょうねえ。金がなければそんなに輸入もできないんで（笑）。実は、食料自給率を下げてるのは飼料なんです。飼料の自給率は二八％ぐらい。食生活が食肉に向かってきたのに、基幹となる飼料が作れない構造になっていて。

宮原　それを改善するために稲わらをえさにする工夫をしてきたんですが、それもセシウムで……。

均質化から多様化へ

――抜本的に直す方法はないんですか？

東城　自動車を売らなきゃいい（笑）。その代わり農業をやればいいんです（笑）。やっぱり五百兆円のGDPって、重すぎますよね。日本経済はこれを毎年稼ぎださないとやっていけない。食料自給率が低いのもある意味当たり前ですよね。昔は一ヘクタールあれば、農家はやっていけたんですよ。いまはせいぜい稼げて百万ですか？

宮原　稲作だと赤字になっちゃうかも。機械買って肥料や農薬買って、苗まで買って。アメリカで一つの農家集団が経営している面積は、何百ヘクタール。フランスは四〇ヘクタールぐらいですが、ワインのように付加価値をつけるのが上手です。

――狭い諏訪の農業はどうすればいいんでしょう？

宮原　原村とか、規模の大きいところは現在もあるので、あとは諏訪でしか穫れない作物が何かできるか。

東城　たとえばフキとか、けっこういいものはあるんですよ。諏訪なんか、これからの日本型の農業を考えていける余地を残している地域ですよね。その基盤がある。まずは固有種や原種でしょうね。

宮原　大きな種子会社は、種をわざわざ農家に作れないハイブリッドにして供給してます。もちろん、成長性や収量性といったメリットはあるわけですが。遺伝子組み換えじゃなくても、もともと何倍体とかいうハイブリッドなんです。

――エライことだ。放射能より怖いよ（笑）

宮原　であるがゆえに、地域で自立する道を考える必要があると。アメリカで化学肥料を使い続けて農地の持続性が失われるとか、均質化や収量性ばかりに偏った歪みはすでに出ています。多様化が必要なんです。農作物って、年ごと場所ごとに違うのが当たり前でしょう？

日本型農業の ヒントは三澤勝衛

――国の農業政策が悪いんですか、それとも農業を研究してる人？（笑）

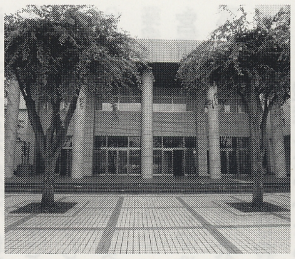
東城　両方だね（笑）。農民は作るだけ作って、購買や販売は農協が一元的にやるように、国が法律まで作ってやってきましたから。その農協がちゃんと改革できなかった。農民も自分で売る知恵を出さなくなったり、努力をしなかった。ネット通販でだいぶ変わってきてましたけどね。

宮原　だからそれこそ清陵魂じゃないですけれども、一人ひとりが自立して先を見いだす農家になれれば、道は開けるんじゃないですか。

東城　三澤勝衛先生の講演録（農文協）を読むと、小さな地域ごとの気象や土壌をしっかり読んで、その地域に合った農業をしなさいと話してるんですよ。「微気象」っていうんですけど、そういうことを、戦前の高校（旧制中学）の先生が、ちゃんと見いだして言っていた。いまこそ大事なことですね。

――ああ、やっぱり清陵に帰ってきた（笑）

●7月8日、神田シティホテルにて



清陵中高一貫化への10の質問

諏訪清陵高校では、平成26（2014）年4月から中高一貫校になることが決まり、同窓会もこれを支持・支援していくことを決めています。しかし東京清陵会の皆さんの中には、まだまだ疑問や不安をお持ちの方も多いことと思います。そこでこのページでは、石城正志教頭の協力のもと、改めて10項目のQ&Aをまとめてみました。ご参考としていただければ幸いです。（文責＝石埜穂高）

Question 1 そもそもなぜ中高一貫化を決めたの？

A もともとは少子化に対応した長野県の高校再編計画の中で、東北信と中南信に各1校の「併設型中高一貫校」のモデル校を置くという県教委の方針がありました。清陵では、さまざまな懇談会や意見公募、それに同窓会の後押しも得て、これに手を上げたわけです（東北信では屋代高校が決定、平成24年開校予定）。背景には、進学成績の長期低迷や、諏訪地域から毎年80～100名の子供たちが大学進学をめざして他地域に流出しているという事情もありました。何か手を打たなければいけない、という問題意識が地域で共有されたのです。

Question 2 諏訪でも中学受験競争が始まるの？

A まず確認しておかなければいけないのは、「併設中学は2クラス80人のみ」ということです。これには、既存の市町村立中学校との無用な競合や混乱を避ける意味もあります。この80人は基本的にエスカレーター式に高校に入りますが、高校が今までどおり6クラスとすれば（高校の定員は県教委が毎年定める）、残り4クラス分の生徒は高校入試を受けて清陵に入ることになります。

中学入学者の選抜については、「適性検査」「小学校から提出された報告書」「面接」の3つを資料として、「6年間の中高一貫で学ぶ意欲や適性などを総合的に判定する」と県教委が決めています。このうち「適性検査」とは、小学校での学習内容をもとに、思考力、判断力、表現力などをみる筆記試験です。

学校では、首都圏の私立高のような大学受験を目的とした中高一貫教育とは一線を画し、あくまでも地域に根差した人間教育をめざしていくとしています。

Question 3 すると中高一貫化の教育目的は何？

A 県教委は中高一貫化により、「6年間を接続することで、『ゆとり、まじわり、つながり』のある学校生活を送ることができ、計画的・継続的な教育指導を展開することで、生徒の個性の伸長や優れた才能の発見がより期待できる。また、異なる学年の生徒同士の共通の活動を通して、社会性や豊かな人間性の育成も期待できる」としています。これを受けて清陵では、次のような教育理念を県教委に示しています。

一、明治28年以来の伝統に培われた「高い学力」「広い視野」「強い意志」を基礎に、21世紀の社会に貢献できる優れた人材を育成する。

二、生活全般を通して多様な経験を積む機会を設け、豊かな人間性や公共性、社会性を育む。

Question 4 どんな教育をするの？

A 教育理念としての「高い学力」「広い視野」「強い意志」を具現化するために、現在次のような観点の教育活動について検討しているそうです。

〈高い学力〉
○将来の研究活動や社会貢献につながる重厚な教養主義による確かな知性の伸長
○探究的な学習による深い思考力と主体的に学ぶ力の涵養

〈広い視野〉
○社会の人々との触れ合いをとおした、共同意識やコミュニケーション能力の育成
○幅広い年齢集団の交流を活用した、協調性や指導力の涵養

〈強い意志〉
○6年間の計画的な進路学習による将来を展望する構想力と自立心の育成

同窓会総会などさまざまな場で、

校長・教頭から「清陵型人間教育」というキーワードも出されました。こうした教育の実現にあたり、我々同窓生の協力にも期待が大きいようです。

Question 5 中学用の教室などはどうするの？

A 現状の北校舎と運動場の間にある北側部室の位置に、「新中学生棟」を建設する予定ということです。このほか、現在学友会室と更衣室のある場所に「新部室棟」を建て、このなかに学友会室も設置したいということです。現在は基本計画案を県教委に提示し、検討してもらっている段階です。

建設計画については、建物の設計が決まっていないのでまだ何とも言えないようですが、来年3月にまず学友会室・更衣室棟の解体工事を行い、「新部室棟」から建て始め、最後に「新中学生棟」を建設する予定だそうです。

Question 6 中学生と高校生の交流は？

A 長野県の中高一貫の趣旨は、幅広い年齢層の交流を通じて協調性や指導力を養い、広い視野を生むことにあるということですが、現時点では学校行事や学友会活動、クラブ活動などについて具体的に決定していることはまだないそうです。

ただし、可能な限り施設を共用するという県教委の方針もあり、体育館や図書館、グランド、昇降口などは中学生・高校生が原則として共用するそうです。他にも学生活動を充実させるための施設について、県教委に要望を出しているところだということです。

Question 7 反対意見はないの？

A 昨年、清陵が県教委に中高一貫教育導入を正式に要望した前後には、県教委の意見募集や諏訪清陵高校ホームページなどに多くの同窓生やPTAの方が意見を寄せられました。地元新聞紙上での意見表明も相次いだようです。その中には当然、中高一貫導入を危惧する反対意見もありました。

しかし同窓会としては、昨年の総会で討議の結果、「中高一貫教育導入を支持し、支援していく」決定を行い、今年の総会でも改めてその方針を確認しています。また、今年1月には「中高一貫教育導入についての要望書」を県教委に提出しました。正確な情報を得て討議を尽くすことで、同窓会としての意見集約はできてきたように思えます。

Question 8 生徒たちから質問状が出たって？

A 先ごろ学友会では、「中高一貫教育対策特別委員会」を設置し、そこで討議した結果を盛り込んだ質問状を学校側に提出しました。現役生たちも強い関心を寄せているようです。これに対し学校側は校長名の文書で回答しました（7月17日付）。

今年6月の同窓会総会に続いて行われた「談論会」では、その「対策特別委」を作った現役の学友会長も登壇し、「中高一貫化には反対だったが、決まった以上は清陵が大きく変わる唯一最大のチャンスと思ってがんばる」という発言をしました。生徒たちにとっても、清陵の良き伝統を見直し今後を考えるいいきっかけになっているようです。

Question 9 今後のスケジュールは？

A 県教委によると、開校に向けた今後のスケジュールは以下のとおりです。

平成24（2012）年3月
県教委定例会にて
「全体構想のまとめ」
5月　地域説明会
（諏訪・辰野・伊那・塩尻・松本）
平成25（2013）年3月
県教委定例会にて
「具体像の報告」
6月　学校説明会
10月　入学者選抜学校説明会
12月　県立中学校入学者選抜
平成26（2014）年4月
開校、入学式

現時点で決定しているのはこのスケジュールだけで、平成23年1月県教委定例会決定の「中南信における併設型中高一貫校の設置計画について」と、同3月県教委定例会教育長報告事項の「諏訪清陵高等学校附属中学校（仮称）の開設準備について」に書かれていること以外は決定していないそうです。これらの文書は、長野県教育委員会のウェブサイトに掲載されています。

Question 10 我々OB、OGには何ができる？

A 清陵の中高一貫校導入は、県におけるモデルケースという位置づけなので、「全体構想」「具体像」などは、学校が原案を検討・報告・調整した上で、最終的には県教委が決定します。現在は「全体構想」の作成に向けて検討を行っている段階なので、我々OB、OGとして意見や要望を出すことができます。清陵のウェブサイトでも意見・要望を募集していますので、思いのある方は提出されてみてはいかがでしょう。寄せられた意見・要望は学校が検討し、取り入れるべきと判断したものは、「全体構想案」に盛り込んで県に提出するそうです。もちろん、必ず採用されるというわけではありませんが。

「全体構想」に引き続き、来年度からは「具体像」の検討に入ります。この段階では、来年5月に開催予定の地域説明会でも意見・要望を出すことが可能だそうです。

同窓会報の特集に掲載された石城教頭のインタビューでは、OBによるクラブ指導などに期待するという発言もありました。我々に何ができるか。そのことをぜひ、10月14日（金）開催の東京清陵会第45回定期総会・懇親会で語り合おうではありませんか！

一度は行きたい！
＜OB経営＞諏訪の店

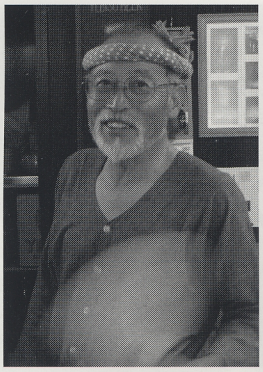
突然ですが、「諏訪に帰ったら寄りたいお店」を四軒取材しました。全て清陵ＯＢが店長です。清陵の今昔話を肴に語り合ったらさぞ楽しかろうと思いまして……。

（取材＝川村益昭、市村高彦）

串焼き「一丁目」

諏訪市大手1-18-14
☎0266-52-6185
店長：花岡茂雄（69回生）

噂の親父はこの日もハッピにハチマキ。気難しそうなギョロ目だが、人懐こそうな笑顔のこの人こそ清陵六九回生、花岡茂雄さん。この店を三五年間一人でやってきた。店内はいろんなものがごちゃごちゃ、でも不思議と居心地がいい。流れる音楽はカントリーミュージックというミスマッチ、かつてＴＶＣＭを創っていたというだけのことはある。メニューを聞けば、「メニューなんかねーよ、おまかせだけ！」と言い切る。牛鳥豚の串焼きに自家製の野菜、季節の魚なんかをうま～く出すんだからメニューなんか要らないんだとか。清陵っぽいなーこの人。値段が心配？「店で大事なのはコミュニケーション。客だけが楽しんでたら俺がつまんねえ。両方が楽しく過ごすためにゃ、俺、ギターも弾くよ。まあ一人五千円てとこかな」と。清陵の自主独立の精神を貫く親父の串焼き、是非一度ご賞味を。



カントリーキッチン「KURUMI」

茅野市ちの236-7
☎0266-72-5240
店主：小池義一（72回生）

上川の畔の「大草原の小さな家」という表現がピッタリなレストラン。高い天井、こだわりの木製家具やアンティークに囲まれた店内には、不思議で心地よい風が吹いている。髭もじゃで優しそうな小池さんの愛称はライオン丸。清陵時代はフォークソング同好会を立ち上げた。店に趣味で作ったステージは、音楽仲間を通じて知らぬ間に広まり、山崎ハコや西岡恭蔵なども何十回もライブを行なっているという。「人気料理は何ですか？」と聞くと長い沈黙の後、「お好み焼き、自然食品だけで作ったやつ」とのこと。試食させていただくと、野菜の甘さが引き立った上品な味。家族連れもこの店ＯＫだな、と感じました。お値段もランチは珈琲飲んでも八百円、夜は普通なら二千円。安すぎると人から言われる程。結婚式の二次会や各種発表会の場になったり、大忙しのレストランだ。

南方屋台料理「トウクトウク」

諏訪市高島2-1258-1
☎0266-57-5232
店主：小松広志（79回生）

高島城と諏訪レイクホテルの中間の三角屋根が目印。我々の目の前で女性連れが「この店おいしいんだってよー」と覗いていたが、生憎この日は満席だった。小松さん、東京のいろんな店の厨房で働いたが、東南アジア好きが高じてタイ料理中心のこの店を出した。清陵時代は軽音楽部でロックバンドを組み、大学時代には「イカ天」にも出場。だがロックを東南アジア風にアレンジして演奏したため、面白がられたが見事不合格で飲食の道へ。さて店内に一歩入ると、家具はすべて現地からの輸入品。実に居心地がいい。もちろん料理も本格派だが、一人二、三千円で十分。四、五〇種類のメニューのうちでもトムヤムクン、パッタイ、ナシゴレンなどが特に人気。「だんだん日本人に食べやすい味がコンスタントに出せるようになってきてね」という。常連の中にはわざわざ東京からやってくる客もいるとか。

割烹居酒屋「かなざわ」

諏訪市大手1-12-5
☎0266-52-0328
ご主人：原幸仁（85回生）

上諏訪駅前成田屋ホテルすぐ裏の立派な門構えのこのお店、八十年続いた寿司屋を改装したといい、大きな提灯が目印。一見高級店のようで入りにくそうだが、実は清陵生ゆかりの良心的なお店。ご主人の原さんは清陵野球部七回生で、夏の県大会ベスト八進出時のレギュラー選手。そのときの相手岡工が甲子園に出場し、清陵野球部も注目を浴びるようになった。その後名門プリンスホテルにスカウトされ、投手として公式戦八勝二敗の成績を上げたという原さん、今も野球を愛し、店内では有名プロ野球選手の記念品の数々が客の目を楽しませてくれる。さて料理だが「おすすめは？」と聞くと、「特にないなー」と言いつつ、春は山菜、秋はキノコ、夏は自家製の夏野菜を中心に料理を組み立ててくれるそうだ。通い詰めるとその日入った食材を使った料理をそっと出してくれたりする。お客さんは宴会から個人のお客、家族連れまで幅広く安心して入れるお店。

村上利雄さんを偲ぶ

村上利雄さん（39回生）は、昨年六月二六日に胸部大動脈瘤破裂のため、満八九歳で亡くなられた。

一九七七年から五年間東京支部第三代事務局長を務められ、小口禎三東京支部長（36回生）を補佐された。さらに、日本青年館東洋軒の代表取締役として便宜を図って下さった。一九七九年から一九九四年まで一六年の長きにわたり支部総会は日本青年館で行われた。出席者が三百名を越えて収容不能になり、会場は虎ノ門パストラルに変更され、現在はアルカディア市ヶ谷になっている。

村上さんは文字通り東京支部草創期を知る生き字引であった。私が事務局長をお引き受けして間もなく、「会費を集めて飲み食いに使うのだろう」という文面の葉書が届いた。意味が分からず、村上さんにお尋ねした。「かつて支部会計の中で盛大な飲食が行われ、不正経理が行われているという騒動があった」と村上さんは具体的に教えて下さった。こんな疑惑を招かないように心がけた。総会運営も村上さんの指示に従っていれば間違いなく安心できた。

現在のような事務局システムができたのは一九九〇年以降であり、それ以前は事務局長は自宅を事務局とし孤軍奮闘しなければならなかった。当時総会通知は往復葉書で、宛名を手書きで行っていた。村上さんはその作業を八重子夫人と二人でされていたのではないだろうか。

娘の美那子さんは、当時のことは余り記憶にないとのことであるが、両親が同窓会の仕事をしていたのはよく覚えているという。一九八〇年に刊行された『諏訪清陵人名録』は、村上さんが事務局長時代のものである。二〇〇一年の『東京清陵会人名録』は、『諏訪清陵人名録』を雛形に制作された。村上さん宅には大勢の同窓生が出入りし、刊行された人名録が部屋の隅に山積みされていたという。奥様は、同窓生の接待にも苦労されたのだと思う。

保延醇一第四代事務局長からバトンタッチを受けた際、「先輩の中でも三井為友（30回生）、安達鉄翁＝阿木翁助（31回生）、村上利雄の三人は、いい加減なことをすると雷を落とすから気を付けること」と注意を受けた。腰が低くいつもニコニコしている村上さんがと不思議に思った。そんな注意のお蔭で、皆さんから叱責されなかったのは幸いである。

村上さんは、下諏訪の老舗旅館「かめや」のお生まれであり、旧姓は岩波である。美那子さんから略歴を頂戴し、多くのことを教えられた。

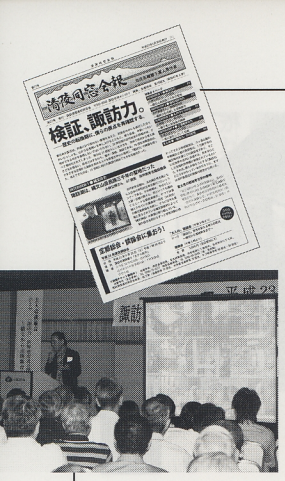
一九四三年九月東京商科大学（現一橋大学）を繰り上げ卒業し、一一月に松本連隊に入隊、関東軍に配属された。敗戦により一九四五年九月にソビエト連邦に抑留され、一九四七年一一月に帰国している。衆議院事務局にお勤めのあと、一九五一年に㈱東洋軒専務取締役に就任された。この間、村上八重子さんと結婚され、村上姓になる。そのほか、東京薬科大学食堂マグノリア代表取締役や東京西洋料理協会会長、日本食生活文化財団理事長等の要職を歴任されている。

東洋軒のほかに、美那子さん経営のお店でお世話になった同窓生は数多い。村上さんとともにこれらのお店がなくなったのは残念である。

一九九二年に奥様を亡くされ、二〇〇三年には腹部動脈瘤の手術をされたのを始めとして背骨の圧迫骨折など次々に病気をされた。美那子さんの看護よろしくそれらの病気を克服され、美那子さんをお供に食生活文化財団の一員として年に一度は中国旅行などを楽しんでおられると伺い安心していた。村上さんからもっとお話を伺っておくべきだった。

これからも暖かい眼差しで私どもを見守って下さるようお願いし、心からご冥福をお祈りいたします。

林　尚孝（東京清陵会顧問）



二〇一一年度 同窓会本部定期総会報告

会報特集と共通テーマの談論会が大盛会

東日本大震災以来、何をよりどころに新しい日本を考えるべきか、僕らはその混沌の中にいる。折も折、幹事学年七八回生が一年をかけて考えてきた総会のテーマは「検証、諏訪力」というものだった。僕らの原点である諏訪とはどんな土地なのか、僕らの遺伝子の中に何を残してくれているのかを検証することが、新たな行く先を見出すきっかけになるのではないか、それを考える場にこの総会をしてみたいと考えたのだ。

会報の特集テーマは「検証、諏訪力」。そして、総会後のシンポジウムは「諏訪力――世界を変える僕らの原点」。共通のテーマで問題提起を行い、それらをもとに「大人の談論会」を開催しようという、初の試みであった。

六月二五日午後二時、例年通りホテル紅やにて定期総会がスタート。昨年度の決算および二〇一二年度事業計画・予算が可決され、役員改選も無事承認された。中高一貫化を支持していくことも改めて確認された。

午後三時、同会場にてシンポジウム開始。まずは七八回生の二名、地歴部考古班OBで現諏訪市教育次長の高見俊樹と、会報の取材・編集を担当した石埜穂高が、会報の内容を写真や映像で補うプレゼンテーションを行い、談論会への口火を切った。

最初は戸惑いを見せた参加者であったが、一人が手を上げると登壇者は引きも切らず、次々と熱弁をふるった。その一端をご紹介したい。

●三沢勝衛先生を源流とする科学教育・人間教育が今の清陵に必要だ。「諏訪清陵大学」の考え方に大賛成。

●中高一貫教育で三〇年後のリーダーを育ててほしい。諏訪の中小企業二千四百社を支える人材を育てよ。

●深志、甲陵へ生徒が流出してきたが、勉強も部活も大切にし、進学に偏らない骨太の人間を作ってほしい。

さらには現役の学友会長の発言もあった。

●学友会に「中高一貫教育対策特別委員会」を立ち上げて生徒の要望を学校に伝えたい。清陵を大きく変え、甘えを一掃する最大のチャンスだと思っている。

あっという間の二時間、最後は中高一貫に寄せる熱き期待と、母校の発展、諏訪の発展を願う思いに満ちた談論会となった。

午後五時、熱気も冷めやらぬまま懇親会場へと場を移し、喋り足りない参加者の談論も織り交ぜて、大いに諏中・清陵らしい盛り上がりを見せた。参加者の皆様、本当にありがとうございました。（川村・石埜）

東京清陵会の現況

データベースから東京清陵会の現勢を見ると次のとおりである（二〇一一・七・三一現在）。

一、東京清陵会会員の定義

(1)首都圏（東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城）在住の同窓生（ただし、退会申出者を除く）。

(2)転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢　総数三五九五名（住所不明者九六〇名を除く）

(1)都県別会員数

東京都一七一三名、神奈川県七四九名、千葉県五〇八名、埼玉県四三六名、茨城県一八名、群馬県二七名、栃木県二六名、その他一一八名

(2)年次別会員数（別表1）

三、会費納入状況（二〇〇八・四～二〇一一・三会計期：二〇一一年三月末現在）

(1)納入者数　八一二名

(2)年次別会費納入者数（別表1）

(3)年度別納入額および人数（別表2）

四、会費・賛助金納入のお願い

二〇〇五年度から実施した賛助金が毎年会費を上回り辛うじて年間収支のバランスを維持しておりますが、二〇一〇年度も会費未納者が多く賛助金に頼る極めて不健全な状況が続いております。会の永続的発展のため、安定運営の観点から、昨年の総会にて、二〇一四年三月の終身会員制度廃止を含む二〇一四年度以降の会費・納入方法を見直すことが承認されました。二〇一一年度からの会計期（三カ年）は従来どおり、会費ならびに賛助金の納入をお願いすることにしました。東京清陵会はお支払いいただいた会費で運営されていることをご理解いただき、会費・賛助金の今年の納入にご協力をお願いします。

編集後記

この年ならではの記事だったと、何年たっても思えるような会報を作ろうというのが、当初からの目標でした。東日本大震災。世界のパラダイムを変える契機になるかもしれないこの事件抜きには二〇一一年は語れないだろうと思い、我々に何ができるかをテーマに議論を重ねてきました。読み返してみると、清陵の頃のような熱い気持ちが伝わってきます。それぞれ経験を積み大人の見識も身につけてきましたが、考える原点は十代の頃に清陵で培った心にあります。鉄槌三度かざしては、の歌詞のとおり、我々が世界を変える原動力になれるかどうか。多分、何歳になってもやれる事は沢山あります。OB・OGの皆さん、いつまでも清陵の心意気を忘れず様々な事にチャレンジしていきましょう。今年当番幹事をさせて頂いた事に心から感謝します。会報作成を通じて旧友たちと熱い議論を交わし、清陵の心を思い出した一年間でした。（伊藤高光）

第18回ゴルフコンペのご案内

会員の交流・親睦を兼ねてゴルフコンペを下記の要項で開催します。
同期生などお誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

●日時：10月18日（火）　7時20分集合　8時スタート
●場所：取手桜が丘ゴルフクラブ（上野駅から常磐線で45分、クラブバス5分）
●プレー代：10,500円（食事付）　会費：5,000円

参加希望の方は、☎03-3518-2385 スタジオパラム＝清水（84回）まで。
FAXの場合は、住所・氏名・卒業回・連絡先を明記の上、
お申し込みください（FAX：03-3518-2386）。

●幹事＝藤森宏一（63回）、大島則夫（75回）、小海健治（84回）

昨年10月21日に茨城GCで行われた第17回ゴルフコンペ。15名が参加、優勝は細川欣一さん（68回）。

別表１　年次別会員数と会費納入結果(2011年7月31日現在)

回生	現員	不明	計	(費)
～26	0	5	5	(0)
27	1	2	3	(0)
28	0	3	3	(0)
30	1	1	2	(2)
31	2	2	4	(0)
32	3	3	6	(0)
33	2	3	5	(1)
34	4	1	5	(0)
35	9	2	11	(1)
36	2	5	7	(0)
37	10	3	13	(1)
38	10	3	13	(4)
39	14	3	17	(3)
40	15	3	18	(3)
41	27	4	31	(9)
42	24	2	26	(10)
43	33	2	35	(7)
44	30	7	37	(10)
45	33	3	36	(14)
46	39	8	47	(11)
47	48	5	53	(14)

回生	現員	不明	計	(費)
48	53	8	61	(19)
49	75	4	79	(33)
50	75	8	83	(38)
51	94	13	107	(53)
52	100	3	103	(62)
55	26	1	27	(12)
56	105	5	110	(73)
57	111	8	119	(78)
58	98	8	106	(73)
59	96	8	104	(67)
60	104	12	116	(77)
61	88	13	101	(69)
62	106	6	112	(62)
63	100	13	113	(76)
64	85	12	97	(59)
65	81	11	92	(50)
66	81	16	97	(46)
67	95	16	111	(48)
68	85	15	100	(51)
69	111	11	122	(59)
70	95	19	114	(44)

回生	現員	不明	計	(費)
71	84	18	102	(37)
72	61	9	70	(28)
73	85	9	94	(31)
74	76	20	96	(32)
75	59	16	75	(19)
76	66	13	79	(31)
77	71	11	82	(30)
78	67	30	97	(16)
79	57	20	77	(22)
80	54	14	68	(14)
81	50	17	67	(12)
82	54	18	72	(8)
83	75	28	103	(25)
84	48	25	73	(11)
85	54	37	91	(15)
86	46	33	79	(13)
87	44	19	63	(3)
88	33	42	75	(9)
89	50	40	90	(8)
90	44	24	68	(5)
91	28	34	62	(2)

回生	現員	不明	計	(費)
92	29	39	68	(3)
93	26	23	49	(3)
94	26	16	42	(1)
95	22	20	42	(2)
96	24	28	52	(3)
97	19	16	35	(1)
98	17	20	37	(0)
99	5	11	16	(0)
100	11	13	24	(0)
101	6	7	13	(0)
102	2	3	5	(0)
103	4	2	6	(0)
104	1	0	1	(0)
105	0	0	0	(0)
106	5	2	7	(1)
107	1	0	1	(0)
108	10	2	12	(0)
109	5	2	7	(0)
110	4	0	4	(0)
111	1	0	1	(0)
	3595	960	4555	(1625)

注 1) 現員:東京清陵会に登録されている会員で、所在不明者を除く。
2) 不明:以前東京清陵会に所属していて現在所在不明のもの。
3) (　)内は今会計期(2008.4～2011.3)会費完納者及び前納者の人数。
75歳以上(2008時点で55回生以前)の会費免除会員数838名
(内終身会員202名)
4) 会費納入者数1,625名と今期納入者数の差は終身会費納入者、その他による。
5) 終身会費納入者数1,230名
(内　死去:128名、所在不明:64名、退会他:29名)

別表２　年度別会費等納入額および納入者数

前々々期納入額総計	(1997.4～2002.3)	7,499,200円	1,371名
前々期納入額総計	(2002.4～2005.3)	1,667,400円	541名
前期納入額総計	(2005.4～2008.3)	6,436,785円	1,167名
内　訳	2005年4月～　小計	3,199,000円	(862名)
	2006年4月～　小計	1,642,785円	(437名)
	2007年4月～　小計	1,595,000円	(395名)
今期納入額総計	(2008.4～2011.3)	4,406,000円	812名
内　訳	2008年4月～　小計	1,960,000円	(456名)
	2009年4月～　小計	1,334,000円	(364名)
	2010年4月～　小計	1,112,000円	(290名)

注)前期および今期納入額には、賛助金も会費として処理されている。

別表３　会員数と次期繰越金の推移

年	会員数（名）	不明者数（名）	次期繰越金（円）
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836
2003	3,630	767	8,951,881
2004	3,528	794	7,281,132
2005	3,410	894	6,192,586
2006	3,300	928	8,217,342
2007	4,000	698	8,385,652
2008	3,849	818	8,627,401
2009	3,822	813	9,108,456
2010	3,628	968	9,075,532
2011	3,595	960	8,543,349

注　1) 次期繰越金は各年の3月現在
2) 会員数、不明者数は各年の7月現在(2004年は5月現在)

収支計算書(案) 自2010年4月1日～至2011年3月31日　(単位:円)

収入の部

科目	予算額	決算額	差異(予算の方が)
1　会費	2,880,000	2,468,000	412,000
(1) 会員年会費(68名)	400,000	193,000	207,000
(2) 総会会費(161＋34名)	1,480,000	1,356,000	124,000
(3) 賛助金会費(222名)	1,000,000	911,000	81,000
2　諸収入	126,000	107,050	18,950
(1)　寄付金	50,000	50,000	0
(2)　預金利子	16,000	4,050	11,950
(3)　会議費負担金	60,000	53,000	7,000
当期収入合計 (A)	3,006,000	2,575,050	430,950
前期繰越	9,075,532	9,075,532	0
収入合計 (B)	11,909,456	12,142,311	430,950

支出の部

科目	予算額	決算額	差異
1　経費			
(1)　総会費用	1,260,000	1,325,712	△ 65,712
(2)　会議費	160,000	159,720	280
(3)　諸会費	60,000	35,000	25,000
(4)　印刷・通信費	750,000	695,013	54,987
(5)　事務雑費	22,000	20,000	2,000
(6)　会報費	750,000	871,788	△ 121,788
2　予備費	50,000	0	50,000
当期支出合計(C)	3,052,000	3,107,233	△ 55,233
当期収支差額(A)－(C)	△ 46,000	△ 532,183	486,183
次期繰越(B)－(C)	9,029,532	8,543,349	486,183

寄付金：本部 40,000　学校：10,000

2011年度収支予算(案) 自2011年4月1日～至2012年3月31日(単位:円)

支出の部

科目	金額
総会費用	1,160,000
会議費	160,000
諸会費	35,000
印刷・通信費	700,000
事務雑費	20,000
会報費	750,000
予備費	20,000
小計	2,845,000
次期繰越	8,471,349
合計	11,316,349

収入の部

科目	金額
総会会費 ※170 名	1,360,000
会員年会費	300,000
賛助金会費	1,000,000
会議費負担金	60,000
寄付金	50,000
受取利息	3,000
小計	2,773,000
前期繰越	8,543,349
合計	11,316,349

(注) 2011年度予算収支差額は72,000円の不足となります。

二〇一〇年度　東京清陵会会務報告

2010年
4・2　当番学年（77回生）第5回進行会議／編集会議（サンルートホテル）
4・9　南信同窓連理事会（新宿中村屋レガル）
5・8　南信同窓連第41回親睦ゴルフ（紫カントリークラブ）
5・15　南信同窓連平成22年度総会（ホテルメトロポリタンエドモンド）
5・15　当番学年（77回生）第6回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
5・16　2010年度第1回事務局会議（神田シティホテル）
5・20　東京同窓連理事会（アルカディア市ヶ谷）
5・29（財）諏訪清陵会理事会・評議員会（清陵高校）
5・29　本部常任幹事会、幹事会（清陵会館）
6・3　南信同窓連常任理事会―新旧役員引継会（新宿中村屋レガル）
6・3　寒水会「現代教育観」を読む会（第3回）（小石川高校）
6・19　当番学年（77回生）第7回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
6・26　本部　定期総会（ホテル紅や）
7・3　東京同窓連総会（アルカディア市ヶ谷）
7・19　臨時事務局会議（神田シティホテル）
7・30　常任幹事会（南青山会館）
7・31　当番学年（77回生）第8回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
8・27　幹事会（南青山会館）
8・28　当番学年（77回生）第9回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
9・15　会報「東京清陵會だより」第21号発行
9・28　寒水会「現代教育観」を読む会（第4回）（小石川高校）
10・2　本部物故会員ならびに道志社先輩慰霊法要及び正副会長・監事・支部長合同会議（地蔵寺）
10・9　当番学年（78回生）第1回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
10・15　第44回定期総会及び懇親会（アルカディア市ヶ谷）
10・21　東京清陵会第17回ゴルフコンペ（茨城ゴルフクラブ）
10・24・25　南信同窓連第23回親睦旅行（伊東温泉）
11・10　南信同窓連第42回親睦ゴルフ（紫カントリークラブ）
11・21　第2回事務局会議（神田シティホテル）
12・2　南信同窓連忘年会（新宿中村屋レガル）
12・8　寒水会「現代教育観」を読む会（第5回）（小石川高校）
12・9　東京同窓連理事会（アルカディア市ヶ谷）
2011年
1・14　南信同窓連平成23年新年会（新宿中村屋レガル）
2・5　東京同窓連平成23年新年会（アルカディア市ヶ谷）
2・19　本部常任幹事会、幹事会（清陵会館）
3・16　東京同窓連親睦ゴルフ会（越生ゴルフ）

二〇一一年度事業計画（実施済）

4・2　当番学年（78回生）第2回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
4・8　南信同窓連理事会（新宿中村屋レガル）
4・16　南信同窓連第43回親睦ゴルフ（紫カントリークラブ）
4・23　第1回事務局会議（神田シティホテル）
4・30　当番学年（78回生）第3回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
5・19　東京同窓連常任理事会・理事会（アルカディア市ヶ谷）
5・21　南信同窓連平成23年度総会（ホテルメトロポリタンエドモンド）
5・28　本部常任幹事会、幹事会（清陵会館）
6・25　本部　総会（ホテル紅や）
7・2　東京同窓連総会（アルカディア市ヶ谷）
7・2　当番学年（78回生）第4回進行会議／編集会議（神田シティホテル）
7・16　寒水会「現代教育観」を読む会（第6回）
7・29　常任幹事会（南青山会館）
7・30　当番学年（78回生）第5回進行会議／編集会議（神田シティホテル）

以下予定
8・25　幹事会（南青山会館）
8・27　寒水会「現代教育観」を読む会（第7回）
9・15　会報「東京清陵會だより」22号発行
10・14　第45回定期総会及び懇親会（アルカディア市ヶ谷）
10・18　東京清陵会第18回ゴルフコンペ（取手桜が丘ゴルフクラブ）
10・30・31　南信同窓連第24回親睦旅行（月岡温泉）
11・9　南信同窓連第44回親睦ゴルフ（紫カントリークラブ）
11・19　第2回事務局会議（神田シティホテル）
12・1　南信同窓連忘年会
12・8　東京同窓連常任理事会・理事会（アルカディア市ヶ谷）
2012年
2・4　東京同窓連平成24年新年会（アルカディア市ヶ谷）
日時未定
・8月以降の当番学年会議、9月以降の寒水会、臨時事務局会議

ホームページリニューアル準備中

総会を目途に更新する予定です。東京清陵会の活動状況紹介のほか、会員のみなさんの行事などの紹介も。清陵関係情報のリンクも多く、2004年12月開設以来12400件のアクセス数。「東京清陵会」で検索して下さい。

訃報

謹んで哀悼の意を表し、
ご冥福をお祈り申し上げます（敬称略）。

氏名	年次	逝去年月日
小林　又蔵	(32回)	2010.10.5
松井　利夫	(35回)	2009.12.5
後町　良定	(37回)	2009.7.3
中島　彦吉	(38回)	2010.3.1
八幡　栄一	(38回)	2011.1.25
今井　文男	(39回)	2009.4.28
田村　邦雄	(39回)	2006.6.19
村上　利雄	(39回)	2010.6.26
大和　栄次郎	(41回)	2010.1.7
小松　益美	(41回)	2009.10.22
浜　健三郎	(41回)	2010.3.24
畑　政歳	(42回)	2010.4.19
林　栄重	(42回)	2010.2.17
山田　茂春	(42回)	2011.4.13
吉澤　登	(42回)	2009.11.20
小松　一夫	(43回)	2009.11.6
吉田　実之	(43回)	2009.10.13
川村　博俊	(44回)	2009.1.9
平井　慎吾	(45回)	2010.7.19
堀川　量平	(45回)	2009.9.8
名取　邦英	(46回)	2010.4.2
宮坂　和男	(46回)	2011.2.17
五十嵐　昭夫	(47回)	2010.7.2
橋本　雅幸	(47回)	2010.8.7
渡辺　隆男	(47回)	2009.12.21
小口　高	(48回)	2010.12.27
矢崎　文彦	(48回)	2011.3.24
花岡　誠	(50回)	2010.4.4
清水　忠義	(52回)	2011.2.15
大蔵　久雄	(56回)	2009.11.4
伏見　高治	(56回)	2010.9.7
守矢　徹生	(56回)	2010.2.16
山田　睦夫	(57回)	2008.11.12
小松　敏郎	(58回)	2010.9.21
歌田　實	(59回)	2011.1.25
小尾　武人	(60回)	2010.12.1
片桐　清男	(61回)	2010.4.1
塚原　隆雄	(61回)	2010.4.30
塚越　洋	(63回)	2011.2.2
中村　幸弘	(63回)	2010.5.17
畑　俊太郎	(63回)	2011.4.17
三澤　敏郎	(63回)	2010.11.25
磯山　和彦	(64回)	2009.11.26
山田　将之	(68回)	2007.10.10
山田　克志	(70回)	2008.12

●事務局に連絡が入った方